国 語 追試験

2023 年度

問題番号（配点）	設 問	解答番号	正 解	配 点	チェック
第 1 問（50）	問 1	1	③	2	
		2	②	2	
		3	③	2	
		4	②	2	
		5	①	2	
	問 2	6	⑤	7	
	問 3	7	④	7	
	問 4	8	①	7	
	問 5	9	②	7	
	問 6	10	②	3	
		11	②	3	
		12	①	6	
第 2 問（50）	問 1	13	④	3	
		14	③	3	
		15	⑤	3	
	問 2	16	④	5	
	問 3	17	①	5	
	問 4	18	⑤	5	
	問 5	19	①	6	
	問 6	20	④	6	
	問 7	21	②	7	
		22	①	7	

問題番号（配点）	設 問	解答番号	正 解	配 点	チェック
第 3 問（50）	問 1	23	①	5	
		24	③	5	
		25	①	5	
	問 2	26	②	7	
	問 3	27	③	7	
	問 4	28	②	7	
	問 5	29	①	7	
		30	③	7	
第 4 問（50）	問 1	31	①	4	
		32	⑤	4	
	問 2	33	②	5	
		34	④	5	
	問 3	35	⑤	5	
	問 4	36	①	6	
	問 5	37	③	7	
	問 6	38	①	7	
		39	⑤	7	

自己採点欄
200点

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

第1問

やや難

出典

北川東子（さきこ）「歴史の必然性について――私たちは歴史の一部である」〈五　歴史への「ゆるい関心」〉（『岩波講座　哲学11　歴史／物語の哲学』岩波書店所収）

北川東子（一九五二～二〇一一年）は社会思想史・ドイツ現代思想の研究者。福岡県出身。大阪大学大学院哲学専攻修士課程修了、ベルリン自由大学で哲学博士号を取得。東京大学大学院総合文化研究科教授を務めた。主な著書に『ジンメル――生の形式』『ハイデガー――存在の謎について考える』などがある。

要旨

1

「自分の不在」と歴史理解　第1～第4段落（歴史家のキャロル・グラックは…）　※問2・問6

歴史への関心や歴史を理解する前提は、自分が存在せず個人の記憶も超えた時間という「自分の不在」の意識である。

2

歴史の「非対称性」　第5～第7段落（私たちが歴史書を読むことで…）　※問2・問3

大多数の歴史的出来事や歴史の体験者と、少数の歴史記述や歴史の登場人物との間には、圧倒的な「不均衡」がある。

3

歴史への「ゆるい関心」　第8～第12段落（この「非対称性」は歴史の権力性である…）　※問3・問5・問6

一般の人々は自分が歴史の当事者ではないことを望み、間接的に関わる立場から歴史を理解したいという関心を持つ。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

4 **歴史解釈の客観性と距離**　第13～第18段落（ヘーゲル以降のドイツ歴史哲学もまた…）　※問4・問5・問6

歴史家は史料の解釈に基づいて現在の視点の範囲で歴史を再構成して理解するため、**歴史への客観性と距離**が生じる。

5 **歴史との正しい関わり方**　第19～第21段落（私たちは歴史の一部でもあるが…）　※問5・問6

人々は「**歴史の捏造**」への怒りを感じた際、自分の体験を基礎として歴史の**正しい理解や議論**に関わろうと欲する。

語句

言説＝ことばにして意見を述べたり物事を説明したりすること。また、そのことば。

解釈学＝文献や芸術作品に表現された内容を理解するための理論や方法に関する学問。

知の地平＝ここでの「地平」とは、物事を考察する際の視界や思考の及ぶ範囲のこと。

解説

問1　標準　1～5

正解は　(i)(ア)＝③　(オ)＝②　(ii)(イ)＝③　(ウ)＝②　(エ)＝①

(i)(ア)「挙げて」　①挙式　②快挙（＝胸のすくような立派な行い）　③列挙（＝一つ一つ並べあげること）　④挙動

①・②・④は〝（よく）行う。事を起こす〟、③は〝言う。数えあげる〟の意。

(オ)「関わる」　①難関（＝通過しにくい関所や場所。切り抜けるのが難しい場面や事態）　②関知（＝かかわりを持ち事情を知っていること）　③関門　④税関　①・③・④は〝せき。関所〟、②は〝かかわる。つながりおよぶ〟の意。

(ii)(イ)「翻弄（＝思うままにもてあそぶこと）」　①本懐（＝以前からの願い）　②謀叛〔謀反〕（＝国・君主に背いて

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

兵を挙げること）③翻意（＝意志・決心を変えること）④奔走（＝物事の実現のために走り回って努力すること）

(ウ)「怠惰（＝なまけてだらしがないこと）」①駄作（＝出来の悪い作品）②惰性（＝今までの習慣や勢い）③妥協（＝対立する者が譲り合って穏やかに決着をつけること）④長蛇（＝長く大きなヘビ。一列に長く続くものの比喩）

(エ)「徹底（＝一つの思想・態度などがすべてで貫かれ、隅々まで行き渡ること）」①根底（＝物事のおおもと）②探偵（＝秘かに他人の行動・内情をさぐる人）③体裁（＝一定の形式。世間体）④策定（＝あれこれ考えて決めること）

問2 標準 6 正解は⑤

傍線部の内容を問う設問。傍線部A直前の「あるいは」に着目すると、Aと並列される類似の内容が直前の段落までにあると見当が付く。それが第2段落の「自分がいなかった時間を生きた人々の存在を意識することで、『個人の記憶に直接に残されている出来事より前の時期』としての歴史（＝歴史理解）を意識するようになる」、第3段落の「『私たちが歴史の一部でしかない』（＝「自分はそこにいない」（＝「自分の不在」）からこそ、歴史（＝歴史理解）を把握できる、あるいは把握しておきたいという態度（＝前提とする）」である。加えて、「自分の不在」という語が登場する第9段落の「私が歴史に関心を抱く（＝歴史理解を欲する）のは……歴史の当事者ではない（＝「歴史の一部でしかない」（＝「自分の不在」））からである」も踏まえると、傍線部Aは次のように説明できる。

自分が存在しなかった時間や自分が歴史の当事者ではないという意識を前提として、個人としての自分の直接的な記憶が及ばない過去の出来事を把握できる、または把握しようと関心をもつこと。

これと合致する「**自分の不在**」および「**歴史理解**」の内容を示すのは⑤のみである。

① 「当事者の立場で」や「体験（＝自ら身をもって経験すること）した出来事だけを」が右の「歴史理解」と正反対。

② 「自分が生きた時代の出来事」を「位置づけて把握」しても、自らの体験や記憶の及ばない歴史の把握にはならな

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

い。

③「歴史を動かした少数者だけを」が出来事や当事者でない個人と無関係な説明で、歴史の定義を限定し過ぎている。

④「人々の経験から学ぼうとする」は、出来事の把握とは違い、価値判断（学ぶに値する教訓等）に基づく点で誤り。

問3 標準 7 正解は④

傍線部の理由を問う設問。傍線部Bに省略された主語を補ったうえで、「**私たち**」や「**願望**」という語を手がかりに理由につながる箇所をおさえて考える。まず主語は直前の「この『**非対称性**』」である。これは第5～7段落によれば、「歴史に登場できるのは私たちのほんの一部の人々」であり、「おびただしい過去の出来事のなかで、歴史として知る価値があるのはごく一部である」ことを指す。「非対称性（＝つりあわないこと）」とほぼ同じ意味の「**不均衡**」という語にも着目すれば、少数の「歴史記述」「登場人物」（＝歴史になり得たもの）と大多数の「歴史的出来事」「体験者」（＝歴史になり得なかったもの）との間の「圧倒的な」**格差**を意味する。よって、この「非対称性」は〈歴史になり得なかった私たちに非力さを感じさせる〉（＝「歴史の権力性」）という**否定的意味**を持つと解釈できる。Bは「しかし同時に」と逆接に導かれるから、この「非対称性」は何らかの**肯定的意味**も持つはずである。そこでBの直後に着目すると、「一人のささやかな市民（＝私たち）」は「自分が歴史に登場しない（＝歴史の当事者にならない）こと」により、「平穏な生活が続き」「歴史的出来事に翻弄されないこと」を「願う（＝願望）のである」とある（たとえば歴史的な一大事に巻き込まれた場合、平穏な生活を続けるのは難しいだろうことを想像するとよい）。以上より傍線部Bの理由は次のように説明できる。

人々や出来事の一部しか歴史になり得ないという「非対称性」の前提は、歴史の当事者にならないことで、歴史に翻弄されずに平穏でささやかな一市民の生活を送りたいという人々の願いを表しているから。

これと合致するのは、一文目で「非対称性」を、二文目で「私たちの願望」を説明した④のみである。

①「多くの人々が慣れ親しんだ」が「非対称性」と合わず、「そこに生きた……意識したい」も「願望」から外れる。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

②「歴史を動かした者の体験」は「非対称性」の内容と焦点がずれ、「責任からは免れたい」も「平穏な生活」とは別。
③「権力を持つ者に関する記憶」が、上述の「歴史の権力性」の意味を取り違えた誤り。
⑤「時代を大きく動かした人々を中心として」だけでは「非対称性」の説明が不十分。「書物を通して」や「価値ある出来事だけを知りたい」も「願望」の内容と大きく異なる。

問4 標準 8 正解は①

傍線部の内容を問う設問。「健全な歴史家意識」を説明するわけだが、傍線部Cを含む一文の冒頭「たとえば」に着目すると、この一文が直前の第14段落の末尾「歴史の解釈学」の具体的例示だとわかる。さらに、Cの直前には歴史学者ドロイゼンが「くどいほどに」「説いている」「史料研究の重要さ」とあるから、「解釈（学）」の語義と考え合わせると、Cはおおよそ〈歴史家が史料から歴史を理解しようとする際に持つべき姿勢〉を示すと推測される。そのうえで、Cの直後の言い換えの「つまり」に着目すると、「記述をする者は、シーザーやフリードリヒ大王（＝少数の歴史の当事者たち）のように、特に高いところ（＝当事者のみに許される特権的な位置）にいて出来事の中心から見たり聞いたりしたわけではない」とあり、続く第16段落でも「歴史家とは……みずからが歴史に登場するわけではない」と述べられるから、Cの「姿勢」はまず〈**当事者ではない立場からの歴史理解**〉を示す。では、歴史家がどのように歴史を理解するかと言えば、「史料研究の重要さ」や第18段落の「すでに書かれてしまった外国語のテキストを読むような態度」という比喩が示すように、〈**史料や文献を解釈することを通じて**〉の他はない。だが、そうした方法に拠る以上、ドロイゼンによる定義や第17段落が述べるとおり、〈歴史とは現在の私たちの知識や視点の及ぶ範囲で再構成できる断片的なものに留まらざるを得ない〉。したがって、こうした歴史理解は「外の視点から行われる」ゆえに「歴史認識の客観性」を持つ一方、過去の出来事の総体という対象そのものには及び得ない点で、「**歴史的出来事からの『解釈学的距離』**」を伴うと言える（第18段落）。以上、〈当事者でない立場〉〈史料に基づく解釈〉〈対象との距離〉という要点を示

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

した選択肢は①である。

② 「断片的な事実だけ」から「知りうることの総体」を「歴史として確定」させる行為には、史料研究や解釈の重要性が欠落しており、適切な「解釈学的距離」を保った「歴史認識の客観性」も生まれないだろう。

③ 歴史家の立場について、「歴史哲学への懐疑」は第13段落、「市民の代理として歴史を解釈」は第11段落の記述に沿うものの、これらは傍線部Cで示される「史料研究」に関する姿勢とは直接関係がない説明である。

④ 「自分も歴史の一部（＝当事者）として」や「実際に生きた人々の体験のみを記述」が誤り。

⑤ 「現在の視点から（整理された）」は、本文では人々の「知の地平」や、それによって再構成された過去の出来事に関する形容で、史料自体が「現在の視点から」書かれているのではない。また、第18段落の「観察者」が行うのは「外の視点から行われる再構成」（＝歴史認識）で、テキストなど「記述された歴史だけ」を対象とするのではない。

問5 標準 9 正解は②

傍線部の内容を問う設問。第19～21段落で繰り返し述べられる「私たち」のあり方をおさえ、「歴史に内在」するとはどういうことかを説明する。まず「**私たち**」とは「歴史の一部でしかない」大多数の人々を指し、いつもは「歴史にたいして『**ゆるい関心**』しかもたない」とある。「ゆるい関心」とは第10～12段落によれば、「まったく無関係ではないが、他方で、当事者そのものでもないような事柄にたいする関心」、「みずから歴史をつくり、歴史を変えたいという欲望ではな」く、「歴史を理解したいという関心」であり、「歴史にたいしては『間接的な関わり方』」である。そのような私たちが「『ゆるい関心』が『歴史との正しい関わり方』でないことを感じる」のは、「『**歴史の捏造**（＝事実でないことを事実のようにつくり上げること）』**が感じられ**」、「**激しい焦燥**（＝いらだちあせること）**や憤りの気持ちを抱く**」ときである。その際、「歴史の一部でもある」私たちは「『自分の体験』が歴史を正しく理解するための基礎となり、歴史的出来事について客観的に議論するための基盤であってほしいと切望する」、すなわち、それまでの**歴史の外に立**

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

つ態度を改め、歴史の当事者・証言者として自分の体験を歴史の中に位置づける（＝歴史に内在する）ことを欲すると言える。以上を踏まえて消去法で解く。

①不適。「ゆるい関心」は「自分は歴史の一部でもある」ではなく「歴史の一部でしかない」意識と言うべき。

②適当。「ゆるい関心」の内容、私たちの態度が改まる契機、「（歴史への）内在」の説明のいずれも上述に沿う。

③不適。私たちが切望するのは客観的な議論であり、歴史家と違って素人が自ら「歴史を記述しようとする」は誤り。

④不適。「『歴史の捏造』を生み出す自己の関わり方」と書くと、私たちが「歴史の捏造」の原因であるかのように読める点で誤り。また、「歴史的出来事と歴史記述の間の不均衡（＝非対称性）を解消」も本文にはない。

⑤不適。「自己の体験を客観的な歴史に重ね合わせようとする」を正答②と比べると、自己の体験がそのまま客観的な歴史となるかのように読めて不適切。本文の述べる自己の体験は、あくまで客観的な議論の「基礎」に過ぎない。

問6 やや難 10〜12

正解は (i) a＝② b＝② (ii)＝①

本文を読んで生徒が書いた【文章】を推敲させる設問。(i)では【文章】に引かれた傍線部の部分的な修正が、(ii)では【文章】の末尾に書き加える「まとめ」が問われる。本文と資料を関連づける発展的な設問である。いずれも本文の理解に基づく【文章】である以上、解答や選択肢の見極めの根拠は、第一に本文の内容との整合性、第二に【文章】内の文脈における整合性、第三に設問の要求に沿うかという点である。以上をふまえて、消去法で解くのがよい。

(i) a 「自分の不在」や「ゆるい関心」というキーワードを活用する効果について、「難しい話題が扱いやすくなる」という傍線部の主旨を、より本文の内容に即した説明へと修正している選択肢を考える。

①不適。「筆者の体験をふまえて」が誤り。「自分の不在」や「ゆるい関心」は広く一般的に当てはまり、筆者個人に限定されない。また「難しい話題が扱いやすくなる（＝わかりやすさ）」というaの主旨からも外れる。

②適当。「複雑な」→「端的に表現」という方向性がaに合致する。【文章】との整合性の面でも、「歴史学の専門家で

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

はない読者にも理解しやすい」キーワードの用い方として、「自分の不在」などは「端的な表現」に当てはまる。

③不適。「理論的な根拠に基づいて」が誤り。本文の「ゆるい関心」は、先行する学説や理論に発したキーワードではなく、筆者によって命名されたもの（第10段落「そのような関心を……名づけておこう」）。また、専門家の議論に基づくだろう「理論的な根拠」も、【文章】の「歴史学の専門家ではない読者にも理解しやすい」にそぐわない。

④不適。「多岐にわたる議論の論点を取捨選択する」が誤り。本文では「自分の不在」や「ゆるい関心」と並んで比較すべき論点が数多く挙げられてはいない。加えて【文章】の述べる「理解しやすい」や「論点を印象づける」という説明にも沿っていない。

b　傍線部は、同じ段落の冒頭にあるように、「キーワードが歴史家の言葉と関連づけて用いられていること」で**本文が説得力を持つものとなった**と述べている。

①不適。「筆者の主張を権威づけている」とあるが、専門家の言葉を用いて文章に外側から「権威（＝人々を強制し服従させる威力）」を持たせることではなく、先行する議論の基盤の上に立った自らの主張であることを内側から読者に納得させることが、本来の「文章を書く上での技術や工夫」（設問）と言える。

②適当。「キーワードの背後にある専門的な知見の蓄積」が、bの「説得力」につながるとともに、本文や【文章】の述べる「自分の不在」とグラック、「ゆるい関心」とドイツ歴史哲学の関連性にも当てはまる。

③不適。「自分の不在」や「ゆるい関心」の「対極にある既存の学説」が本文になく、「批判的に検討」もされていない。

④不適。たとえば「自分の不在」に関して引用されたグラックやホブズボームの見解は大きく異なるものではなく、一つのキーワードにまとまるので「多様な見解」とまでは言えない。また、「抽象化」も「説得力」には直結しない。

(ii)　【文章】の末尾に書き加えるまとめであるから、まずは(i)a・bでおさえたキーワードの活用とともに、【文章】最

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

後の一文「ただし、**歴史家の言葉と筆者の主張は必ずしも一致しているわけではない**」という文脈との整合性に留意する。加えて、本文全体の構成を巨視的に捉えて（要旨も参照）、筆者が先行する議論を参照・活用しつつ（「自分の不在」「非対称性」「ゆるい関心」「解釈学的距離」）、最後にはそれらと異なる**自らの主張へと議論を発展させている**（「歴史の捏造」「歴史との正しい関わり方」）点もふまえて考えたい。

①適当。「従来の学説を正確に提示するとともに」は(i)bで見たキーワードの活用と合致し、「その問題点をわかりやすく説明する」も、**【文章】**最後の一文の方向性に当てはまると同時に、本文の終わりで「ゆるい関心」だけでは対応しきれない「歴史の捏造」や「歴史に内在しようとする」意志に言及している点にも沿う。加えて、先行する議論の内容に留まらない主張の明示によって読者の「問題意識」につながる、という記述にも無理がない。

②不適。「専門的な見解を根拠として」や「読者も前提となる知識をふまえて」と述べるだけでは、**【文章】**の最後で示す、先行する議論と筆者の主張との違いに対応した説明とは言えない。

③不適。「専門用語を適切に使用して」は(i)aで見た〈わかりやすい〉キーワードに反し、「身近な事例を挙げて」や「読者も具体的に……把握し」に当てはまる事例の明示（「歴史的出来事」とは具体的に何を指すか）は本文にない。

④不適。「多様な学説」の「相互の整合性を確認する」に当てはまる記述が本文にはない。

第2問

やや難

出典

太宰治「パンドラの匣（はこ）」（新潮文庫、筑摩書房『太宰治全集9』所収。初出は一九四五～一九四六年）

【資料】のⅠ　外山滋比古（とやましげひこ）『「読み」の整理学』〈第Ⅳ章　5　読みと創造〉（ちくま文庫）

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

太宰治（一九〇九～一九四八年）は小説家。本名は津島修治。青森県出身。東京帝大仏文科中退。芥川龍之介に影響を受け、井伏鱒二に師事する。左翼運動からの離脱、自殺未遂を経ながら、自我の傷や罪の意識を反映した作品を多く発表し、「無頼派」「新戯作派」「破滅型作家」と呼ばれる。玉川上水で愛人と入水自殺し、遺体の発見日かつ誕生日の六月十九日には桜桃忌が営まれる。主な著書に『富嶽百景』『津軽』『斜陽』『人間失格』などがある。

外山滋比古（一九二三～二〇二〇年）は英文学者・評論家。愛知県出身。東京文理科大学卒業。お茶の水女子大学名誉教授。専門の英文学以外でも日本語論や読者論など幅広い分野で活動し、主な著作に、ロングセラーとなった『思考の整理学』をはじめ、『修辞的残像』『日本語の論理』『忘却の力』などがある。

要旨

空白行で区切られる三つの部分に分けて本文の内容をまとめよう。問7の【資料】Ⅱについてもまとめておく。

1 **「かっぽれ」の俳句と「越後獅子」の批評**（きょうは一つ、かっぽれさんの…）※問2

発表会に提出するため何日も苦心した俳句を越後獅子に一言で切り捨てられたかっぽれに僕は同情した。

2 **「かっぽれ」の盗作と「僕」のジレンマ**（かっぽれは、蒼ざめて…）※問2・問3・問4・問7

盗作したかっぽれへの配慮と反感の間で悩んだ僕は、図に乗る態度と句の勝手な解釈にあきれ、忠告を決意した。

3 **句の交換と修正案、思わぬ賛辞と「僕」の困惑**（「でも、これとよく似た句が…）※問5・問6

盗作の句を替えさせて安心した僕は口にした修正案を褒められ、今後もかっぽれの俳句の相談役となる重荷を背負う。

僕は、入れ替えた句を作ったのはマア坊だったと知って驚く。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

〈盗作〉への「マア坊」の反応と「僕」の考えの変化　（「慰安放送？　あたしの…」）※問7

句を盗作されても平気なマア坊に接した僕は、作者にこだわらない作品の読み替えを肯定的に捉え始める。

語句

俳句の天狗＝ここでの「天狗」とは〝自慢し、うぬぼれる人〟の意で、俳句が得意だと自負する「かっぽれ」を指す。

無邪気＝悪意やひねくれた気持ちがないこと。深い考えがないこと。

首肯＝うなずくこと。納得・賛成すること。

【資料】　**添削**＝他人の詩歌・文章などを、書き加えたり削ったりして改め直すこと。

口角泡をとばす＝（口からつばきを飛ばすほどに）勢い激しく議論するさま。

解説

問1　標準　13〜15

正解は　(ア)＝④　(イ)＝③　(ウ)＝⑤

(ア)　副詞「てんで」には〝もとから。はじめから〟（＝①）や〝非常に。とても〟（＝⑤）の意もあるが、本文の「わからない」のように**否定的表現を伴う**場合は〝まるで。まるっきり（〜ない）〟の意を表す。この**完全否定**の意に当てはまるのは④「全然」のみ。これと比べて、〝結局は。どのようにしても〟の意の②「所詮」は一段劣る。

(イ)　形容動詞「あからさまに」は〝包み隠されたところがなく、**はっきりと表に表されるさま**〟という意。これに合致する③「露骨に」の他は、①「故意に（＝わざと）」、②「平易に（＝難しくなく）」、④「端的に（＝要点だけをはっきりと）」、⑤「厳密に（＝こまかい点まできびしく注意して）」のいずれも語義が外れる。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

(ウ) 副詞「いたずらに」の〝むだに。意味もなく〟という意に沿うのは⑤「無益に」のみ。なお、③「軽々に」は〝かるがるしく。深く注意を払わないさま〟の意。

問2 標準 16 正解は④

傍線部の心情を問う設問。「僕」が「かっぽれ」に対して「気の毒」に感じた状況を本文からおさえる。Aの少し前に「かっぽれは、蒼ざめて（＝恐怖や衝撃などのために血の気が失せて顔色が青白くなって）」とあり、その理由は本文冒頭によれば、発表会に「お得意の俳句を提出する」ために、「二、三日前から」「真剣に句を案じて（＝考えて）」いた「かっぽれ」が、「けさ、やっとまとまった」俳句を同室の者たちに披露したところ、「越後獅子」にただ一言、「**けしからぬ**（＝道理・礼儀などに外れていて許しがたい）」と批評されたからである。「下手だとか何とか言うなら、まだしも」とあるように、**句の内容に言及もせずに切り捨てる態度**を「僕」は「**ひどいと思った**」のである。なお、この段階では、問3で見る「かっぽれ」による盗作行為に「僕」はまだ気づいていない。よって傍線部Aの「僕」の心情の核心は次のように説明できる。

何日も苦心して詠んだ俳句を内容と無関係に「越後獅子」に許しがたいと批判された「かっぽれ」に同情する心情。

こうした状況や、「かっぽれ」の「哀れ」さを明示し、彼が俳句を詠む「制作の労」にも言及した④が適当である。

① 「かっぽれ」への「不安」や「十句そろえたこと」を「褒めてあげたい」思いは、**同情**という核心から外れる。

② 「越後獅子」が「僕」を「先生」と呼ぶ以前に「かっぽれ」は「蒼ざめて」おり、「体面を傷つけていた」は誤り。

③ 「かっぽれ」の受けた衝撃は「越後獅子」の態度によるもので、「笑われたり」の示唆する「固パン」の「苦笑（＝にがにがしく思いながら仕方なく笑うこと）」が原因ではない。また、「不風流」で「俳句の妙味（＝言うに言われぬ優れた味わい）などてんでわからない」と自覚する「僕」が、「持てる最大限の見識を示」そうと考えたと読むのも無理がある。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

⑤「憤り」や「称賛してあげたい」は、①と同様に核心となる心情から逸脱している。

問3 やや難 17 正解は①

傍線部を含む**表現の特徴**を問う設問。表現のどこに注目すべきかは選択肢を読んでから消去法で考えることになるが、先に傍線部B前後の**心情の変化**もおさえておきたい。「露の世は……」の句は有名な小林一茶からの**盗作であると気づいた**「僕」が、そのことを露骨に指摘して「かっぽれに**赤恥をかかせる**」**ことは避けたい**と思いながら、「かっぽれ」の「不服らしく、口をとがらせた」応答に接し、**次第にあきれて反感を強めていく**（問4にも関わる）というようにとらえることができる。

①**適当**。「断定を避けた表現」は、Bの前の「……じゃないかな」、Bの後の「……でしょうけど」などに合致し、「そりゃ」「なんだもの」を「軽い調子」の表現と捉えるのも適切。よって、「僕」の**実際の発言**における（「かっぽれ」への）「配慮」と、Bという**内心の声**つまり「僕」の本音における「あきれや困惑」はどちらも正しく、両者の間の「落差」つまり**明確な相違・矛盾**が表現されているという解釈も自然である。

②**不適**。Bの二行後の「ちょっと途方に暮れた」からは、「かっぽれ」に対する配慮とあきれ・反感との間でまだ戸惑っている「僕」の心境が読み取れ、この段階で「怒りが強く示されている」とまでは考えにくい。

③**不適**。「そりゃ、いい筈だ」や「門外漢の僕でさえ」は「僕」の内心の声であり、これらと「同じ意味の表現」がBの前後に二箇所、断定を避けた間接的な言い方で発言されているのみだから、「僕」が「言葉を尽くしても」とは言えない。

④**不適**。「僕」の「かっぽれ」以外の「同室者との会話」は、「越後獅子」への一言（「とんでもない事になりました」）のみで、「常に丁寧な口調」とまで考える根拠に乏しく、「僕」自身の内心の声における「ぞんざいな表現」によって、逆に普段の「僕」の「丁寧な口調」が「明らかにな」るという論理や説明にも疑問が残る。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

問4 標準 18 正解は⑤

傍線部の理由を問う設問。傍線部Cの「もはや」という語も示唆するように、問3から引き続いて、「かっぽれ」による俳句の盗作をめぐる「僕」の心情の推移をおさえる。Cの前までは「かっぽれ」に恥をかかせるまいという配慮と、盗作行為への反感との間でためらっていた「僕」の状況から考えると、「もはや笑わずに」の〈笑う〉とは、「かっぽれ」に対して**直言を避けた柔らかく曖昧な態度**を示し、かつ、そうした態度をとれるだけの「僕」の精神的な余裕も指すだろう。そうした態度や心境を「僕」が改めた理由は、Cの直前によれば「図に乗って来た」「かっぽれ」の「僕を軽蔑するような口調」であり、そうした言動を不快に感じた「僕」は、ついに「かっぽれ」のひけらかす句の「まごころ」について直接に「**反問**（＝問い返すこと）」**せざるを得ない**と思ったのである。よって傍線部の理由の核心は次のように説明できる。

自分を軽蔑する「かっぽれ」の言動に接して反感を強めた「僕」は、彼への配慮から直言を避けていた姿勢を改めて、彼の主張と正面から向き合うべきだと決心したから。

これに沿う選択肢は、「かっぽれ」の「『僕』を軽んじる態度」と、「僕」が「調子を合わせるのを止めて」という要点を明示した⑤である。

① 俳句への「かっぽれ」の「真摯な態度」は本文に反し、「（句を）添削しようと意気込んだ」も無根拠。

② 「稚拙な俳句に対して笑いをこらえるのに必死であった」は「笑わずに」の内容の取り違えであり、「俳句に対する真剣な思い」も、盗作しておきながら調子に乗る「かっぽれ」の言動とは正反対。

③ 「盗作であることに気付いていることを匂わせ」や「お互いの上下関係を明確にするため」は本文に根拠がない。

④ 「俳句に込めた彼の思い」の「追及（＝追いつめて責めること）」ではなく、句の「まごころ」という主張の内容を問いただす、が正しい。また、俳句にうといと自覚する「僕」が、「言い分を否定しよう」とは思わないはず。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

問5 標準 19 正解は①

傍線部の心理を問う設問。中心は傍線部D自体の説明だが、加えて設問の求める「君」に宛てた手紙としての意味も考える必要があるため、Dの心理をおさえたうえで消去法で解くとよい。「僕」の「内心の声」とは直接には直前の「そんなもの（＝「コスモスや」と「コスモスの」のどちらが初句としてよいか）、どっちだっていいじゃないか」を指す。CとDの間の状況をおさえると、思い切った指摘（「これとよく似た句が……」）によって、盗作である「露の世は……」の句を「かっぽれ」に取り下げさせることに成功した「僕」は、かわりの句「コスモスや……」の初句について、「安心のあまり」につい「よけいの事」（「コスモスの」と直すべきこと）を口にした。これに対する「かっぽれ」の反応は「偉いねえ」「隅に置けねえや」（「隅に置けない」は〝思いのほかに才能や技量などがあって軽視できない〟の意）であり、こうした肯定的評価に「赤面した」り「落ちつかない気持になった」りした理由は、問2③でも見たように、「僕」には俳句への興味があまりないからだと考えられる。加えて、こうした動揺や困惑の思いが実際の発言ではなく内心の声である理由を考えると、問3や問4で触れたとおり、俳句好きの「かっぽれ」に対する配慮が働くからだろう。しかし他方では、それを本文の読み手である「君」には伝えているのだから、こうした思いを言わずにはいられない心理も存在し、それが「（内心は）叫んでもいた」という無意識の自発的かつ両義的な（伝えたいと同時に伝えたくない）表現に示されていると判断できる。

①適当。「修正案を思いもよらず激賞（＝大いにほめること）され」や「俳句に関心がなく」という状況の説明、「事態にあわてて」や「展開に違和感」という心情の説明、「知ってほしい」という「君」への思い、いずれも正しい。

②不適。「舞い上がって（＝いい気になり浮かれて）」が誤り。「かっぽれ」の句との関わりが「恥ずべき」も言い過ぎ。

③不適。「かっぽれ」を「はっきりと糾弾（＝罪状・責任などを問いただして非難すること）できない」ために「微細な修正案」に留まったように読めるが、「僕」は無意識に「修正案」を口にしたので、深く考えての行為ではない。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

④不適。「君」から「修正案に批判的な見解が出され」ること、それを「僕」が防ぎたいと考えることに根拠がない。
⑤不適。「どう修正しても……良くなることはない」や「客観的に価値判断できている」という「僕」の思いは本文に見当たらず、むしろ俳句というものへの興味のなさ、自らの揺れる気持ちを伝えたいという主観がDに表されている。

問6 標準 20 正解は④

傍線部の理由を問う設問。問5から引き続く状況を前提に、傍線部E「かなわない」の心情をおさえる。予想外に「修正案」を評価されて動揺し、内心では違和感を抱く「僕」に対して、「かっぽれ」は「これからも俳句の相談に乗ってくれ」と「真顔で頼んで」「意気揚々（＝得意で誇らしげなさま）と」引き上げていく。その姿を見送る際の心情がEであり、直後にも「俳句の相談役など……**困る**」や「どうにも落ちつかず、**閉口**（へいこう）（＝どうにもならずに困ること）の気持で」、「**まいったのである**」とあるから、「僕」は今後も「かっぽれ」から（実は興味のない）俳句について様々に話を持ちかけられるに違いないと予測し、それが**避けられない**（＝かなわない）ことを嘆いているとわかる。加えて、問4も考え合わせると、「かっぽれ」は「僕」を軽蔑する言動から一転して「僕を尊敬したよう」な態度に変化しており、こうした**移り気で本心の知れない厄介な相手**としても**手に負えない**（＝かなわない）と感じているのだろう。以上を踏まえて消去法で解く。
①不適。「いらだちを見せたところで」が誤り。Dも含めて「僕」は本音を「かっぽれ」に示すことなく見送っている。
②不適。句の差し替えの提案に対して「かっぽれ」は「敵意をむき出しに」はせず、「眼を丸くして（＝驚いて目を見張るさま。なお〝激怒するさま〟を表すのは「目を三角にする」）」、嘆きながらも「あっさり」と別の句を示した。また、「これ以上まじめに応じる」かどうかに関係なく「かっぽれ」が相談してくることに「僕」は困っている。
③不適。「けなげ（＝非力な者が感心な心がけで努力するさま。殊勝（しゅしょう））な態度」という肯定的評価が誤り。
④適当。移り気な「かっぽれ」の「捉えどころのない」態度が説明されており、これから俳句の相談を持ちかけられ

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

るだろうことも含めて「（「僕」が）振り回されてばかりいる」と表現するのも無理がない。

⑤**不適**。「自分はからかわれていた」とあるが、「かっぽれ」の眼を見た「僕」の、「盗んで、自分で気がつかぬ」や「無邪気な罪人」という感想からして、「かっぽれ」は何か真面目な本心を隠し持つ人物ではなく、生まれつき無意識に、道義に反する行為をしたり他人に両極の態度をとったりする人物だと「僕」は捉えており、それゆえに「かなわない」のである。

問7 やや難 21・22

正解は (i)＝② (ii)＝①

本文と【資料】を関連づける設問。「文学作品と読者との関係」について、(i)では二重傍線部（「かっぽれ」が一茶の句を「勝手な意味」に解釈する行為）を【資料】のⅠを踏まえて再解釈させ、(ii)では【資料】のⅠも踏まえつつ、二重傍線部に関する「僕」の本文における捉え方が【資料】のⅡの捉え方へどのように変化したかを説明させる。

(i) まず【資料】のⅠの要旨は次のとおりである。

一つの文学作品に対して、多くの読者それぞれが無意識のうちに自分のコンテクスト（＝文脈）に合わせて解釈することで、作品は次第に作者の意図した意味から逸脱して改変され、特殊から普遍へと性格を変えて古典化する。

一方、二重傍線部は、「かっぽれ」の「古人の句を盗んで勝手な意味をつけて、もてあそぶ」行為を「僕」が**否定的に捉えた**箇所である。ここでの「勝手な意味」とは、本来は「一茶が子供に死なれて、露の世（＝はかない現世）とあきらめてはいるが、それでも（＝さりながら）、悲しくてあきらめ切れぬ」という悲嘆や追慕の情を表すと解釈すべきにもかかわらず、C直後に「かっぽれ」の言うとおり、「日本のいま（＝リード文の示す第二次世界大戦の終結直後の激変し混乱した時代状況）」は「露の世である（＝むなしい）」が、「さりながら、諸君、光明（＝逆境の中での希望や明るい見通し）を求めて進もうじゃないか。いたずらに悲観する勿（なか）れ」といった、全く異なる時代・状況、かつ非常に楽観的な意味内容に解釈されていることを指す。しかし、設問の文言に留意すると、「**どのように捉え直すことができ**

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

るか」とあるから、本文の「僕」の否定的な捉え方とは反対に、そして【資料】のⅠが文学作品の読み替えを必然的な古典化の過程として捉えているように、二重傍線部の行為を、より中立的かつ普遍的に説明すべきだと判断できる。この方向に沿うのは、「江戸時代」から「戦後」へ、「その（＝俳句を含めた文学作品の）本来の意味から離れて」「自分たち（＝読者自身）が生きる」「時代（これも広い意味で「コンテクスト」と言える）に即したものへと読み替えている」と示す②である。

① 江戸時代の「人々の心情に思いをはせつつ」は「かっぽれ」の行為に当てはまらず、句の意味を「取り違えている」という表現も、本文の「僕」の評価と同様に否定的である点で【資料】のⅠに即さないため外れる。

③ 「江戸時代と戦後とを対比する」も、「作者の個人的な思い」→「時代を超えた普遍性」という方向性も誤り。

④ 江戸時代の人々と戦後の人々の「境遇に共通性を見いだし」（それは〈読み替え〉ではなく、異なる読みの並存を前提とする）が誤り。「句に添削を施す」とあるが、【資料】Ⅰ中の「添削」は無意識の読み替えを表す比喩である。

(ii) 【資料】のⅡにおいて変化した「僕」の二重傍線部に対する捉え方とは、自分の句（「乱れ咲く……」）を「かっぽれ」に〈盗作〉されても「一向に平気で」、その句が発表会に提出されること自体を楽しみにする「マア坊」の態度が示すように、もともと作品の「作者の名なんて、どうでもいい」のであり、作品は「みんなで力を合せて作ったもの」と感じられ、「自分の心にふれた（＝感動した）作品だけを自分流儀で（＝「通人」つまり専門家や道に精通した人たちの議論やルールとは関係ない、それぞれの自由な仕方で）覚えて」「楽しみ合う」という、本来的な「芸術と民衆との関係」である。こうした捉え方は、【資料】のⅠが述べる〈読者による文学作品の読み替え〉と重なり、それを「僕」が肯定的に捉え始めたとわかる。よって、「僕」の捉え方の変化に関して、「作者が意図する意味（＝一茶の句で言えば〈子供を失った悲しみ〉）に基づいて読むべきだという考え」から、「読者に共有されることで新しい意味（＝「かっぽれ」の解釈した〈戦後における光明〉）を帯びることもあるという考え」へ、と説明した①が適当である。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

②「文学作品の意味を決定するのは読者である」は、本文の時点から変化した後の「僕」の捉え方であるから誤り。また、「作者の意図に沿って読む厳格な態度」がもたらすものについては、本文も【資料】も言及していない。

③「多様性のある価値は……付加されていく」という考えは、文学作品には常に異なる複数の読みが並存している前提に立つと考えられるので、ある解釈から別の解釈へと〈読み替え〉が進むとする【資料】の内容に反する。

④「文学作品の価値は時代によって変化していく」とあるが、これも本文の時点から変化した後の「僕」の捉え方に近いうえに、正しくは「価値」というよりも「意味（＝読みや解釈の内容）」などと言うべき。

第3問 やや難

出典

『石清水物語』〈上〉

【学習プリント】『伊勢物語』〈四十九　若草〉

『石清水物語』は作者未詳。鎌倉時代に成立した擬古物語（全二巻）。東国育ちの武士・伊予守と、公家である木幡の姫君、春の中将をめぐる恋愛を中心に描き、『源氏物語』『夜の寝覚』などの影響が強い。作品名は伊予守が恋の成就を石清水八幡宮に祈願した歌による。本文は上巻の一節で、異母妹である木幡の姫君への悲恋を断ち切れない中納言（男君）が、次第に女二の宮との結婚に前向きになっていく場面である。

『伊勢物語』は作者未詳。平安時代前期に成立した歌物語。「昔、男（ありけり）」から始まる約百二十五（伝本により異なる）の章段から成る。六歌仙の一人で伝説的な色男でもある在原業平をモデルとする「男」の生涯について、恋愛などの和歌を中心に語られる。本文は第四十九段の全文で、「男」が妹に恋心を打ち明ける場面を描く。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

要旨

1 男君の苦悩と決意　1段落（中納言はかかるにつけても…）

男君は木幡の姫君に恋心を抱きながらも、それを紛らわそうと、評判の高い女二の宮との結婚を前向きに考え始める。

2 三条院への参上と女二の宮との逢瀬　2・3段落（神無月十日余りに…）

男君は三条院を訪れ、内心で木幡の姫君と重ねてしまう自分を嘆きつつ、想像どおり美しい女二の宮と逢瀬を過ごす。

3 男君と女二の宮との後朝（きぬぎぬ）の文　4段落（明けぬれば、いと疾く…）

逢瀬の翌朝、男君は女二の宮と互いに名残を惜しむ手紙を交わし、その書きぶりを見て理想的な結婚相手だと感じる。

4 男君と女二の宮との婚儀　5段落（かくて三日過ぐして…）

三日後、盛大な婚儀が行われ、女二の宮の美しさは木幡の姫君にも匹敵すると思って、男君は結婚に満足する。

語句

飽かぬ＝〝満足しない。物足りない〟を表す連語「飽かず」の連体形。

例の＝いつものように。例によって。この格助詞「の」は連用修飾の用法。

すさまじ＝心情について〝興ざめだ。おもしろくない〟の意を表す。

言へばさらなり＝〝言うまでもない。もちろんだ〟の意の連語。単に「さらなり」も同じ意味。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

おろかなり＝並一通りだ。いい加減だ。本文の「おろかならむやは」の「やは」は反語（～か、いや、～ない）の意。
こちたし＝おおげさだ。仰々しい。
かたほならず＝〝不完全だ。未熟だ〟という意の「かたほ（なり）」を打ち消した形。
おぼろけなり＝並一通りだ。普通だ。ただし、「おぼろけならず（＝並一通りでない）」の意でも用いられるので注意。
面立たし＝名誉だ。晴れがましい。
なのめならず・なべてならず＝どちらも〝並一通りでない。格別だ〟の意。
けしうはあらじ＝「けしうはあらず」（＝そう悪くはない。相当なものだ）は連語。「じ」は打消推量（～ないだろう）。
心落ちゐる＝心が落ち着く。気持ちが静まる。
手＝文字通り〝手〟の他にも〝腕前。手段・方法。世話。負傷〟など様々な意を持ち、本文では〝筆跡。文字〟を表す。
思ふやうなり＝望み通りだ。申し分なく理想的だ。
思ひなし＝思い込み。気のせい。（先入観に基づく）世間の評判。

全訳

中納言（＝男君）はこのような（＝自分と女二の宮との婚儀の準備が進められる）状況につけても、他人に知られない心の中では、あってはならない（異母妹である木幡の姫君への）恋心ばかりがおさまるときもなく、（その悩みで）つらくなってゆく気持ちを、無理やりに静めるだけで月日を過ごしなさるうちに、女二の宮の（美しい）ご容貌が有名であると（いう噂を）聞いて心にとどめているので、同じこと（＝どうせ女二の宮と結婚することになる）ならば、（木幡の姫君への恋心の）嘆かわしさが紛れるくらいに（女二の宮を愛するに相応しい相手と）思って見申し上げたいとお思いになった。（男君の）官位が低いのを物足りないことと（院が）お思いになって、（男君は）権大納言におなりになった。春の中納言も、いつもどおり（男君と）同じように（権大納言に）おなりになって、（官位を授けられた）

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

感謝の意を（院に）申し上げることも（男君に）負けないようになさるけれども、手の届かない枝（＝自分が女二の宮との結婚に手が届かなかったこと）という一事のせいで、万事が興ざめだとお思いになった。

十月十日過ぎに、（男君は）女二の宮のもとに参上なさる。（男君が）得意になる様子は、言うまでもない。先に人目を避けて三条院に参上なさる。たいして重要でない場所（を訪れる際）でさえ、格別な配慮をなさる方であるので、いわんや（院や結婚相手の女二の宮を訪れる際に）並一通りであるだろうか、いや、あるはずがない。仰々しいほどに（衣服に香を）たきしめなさって、身だしなみを整えてお出かけになる直衣姿は、優美で、格別な配慮など（のご様子）は、本当にもし帝の婿である御方と呼ぶとしても不足はなく、たとえ（女二の宮を）皇女と申し上げるとしても、もし並一通りのご容貌であるならば、（結婚相手として横に）並ぶのも難しく感じる（ほどに立派な男君の）ご様子である。人目を避けているけれども、先払いをする者なども大勢でお出かけになる（男君のご様子）につけても、もし大宮（＝男君の亡き母宮）が生きていらっしゃるならば、どれほど名誉なことと嬉しく思いなさるだろうかと、殿（＝男君の父）は真っ先に思い出し申し上げなさる。

院におかれては、（男君の来訪を）待ち迎えなさるお心配りが並一通りではない。（男君は）女二の宮のご様子を、早く目にしたいと思い申し上げなさるが、御殿の油の灯りは、灯火がぼんやりしていて、御几帳の中にいらっしゃる（女二の宮の）灯火で見える姿は、ともかくも悪くはないだろうことよと（男君には）思われて、御髪がかかっている（女二の宮の顔の）あたりは、すばらしく（美しく）見える。いわんや、（男君がそばに寄って感じる）近い（女二の宮の）ご容姿が、（男君の）見当をつけていたのと相違なく、かわいらしくおっとりしたご様子であるのを、（男君は）心が静まって、思いがけず近づき寄っていった（恋の）道での迷い（＝木幡の姫君）とも、（きっと）比べてしまいそうな気持ちになる（女二の宮の）人柄でいらっしゃるにつけても、（男君は）真っ先に（木幡の姫君のことが）自然と思い出されて、どのようなお方に（嫁ぐのか）と、人（＝異母妹である木幡の姫君）が（自分以外の誰かと）契りを交わすようなことまでも（つらく）思い続けずにはいられないことは、自分自身のことではあるが嘆かわしいと身にしみて

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

悟らずにはいられない。

（一夜が）明けたので、（男君は女二の宮のもとを）たいそう早くにお出でになって、すぐにお手紙を（女二の宮に）差し上げなさる。

「今朝はいっそう（生気を失って）しぼみ方がひどくなる。女郎花にどれほど降りた露の残り（のせいでそうなるの）か（＝今朝の私はいっそう悲しみが深く気落ちする〔ひどく濡れそぼつ〕。女郎花のように美しいあなたと起きて別れるつらさに、どれほど多くこぼした涙のせいでそうなるのか）。

（十月になると）いつも時雨は（降っていたけれども、あなたと別れた今朝ほどに袖が濡れるときはこれまでなかった）」とある。（院が）お返事を（書くように）勧め申し上げなさると、（女二の宮は）たいそう気恥ずかしい様子で、かすかな筆跡で、

「今朝だけ特別に時雨が降るのだろうか（、いや、そうではない）。女郎花は霜のせいで一面に枯れるのが野原の常なのに（＝今朝の別れだけが特別に悲しくて涙を流すのだろうか。いや、それだけでなく、あなたの訪れがないときの私は、女郎花のように悲しみに沈んでいるのが常なのに）」

と（書いて）、置きなさったお手紙を、（女房が紙に）包んで（男君への使者に）差し出した。ご使者には女物の衣服や、細長（＝貴族が幼年時に着る衣服）などを、（引出物として与えるのは）慣例通りのことである。（女二の宮は、手紙の内容に加えて）ご筆跡などまでも、並一通りでなく美しいように書きなさっているので、（男君が返事を）待ち受けてご覧になるにつけても、すべてにおいて申し分なく理想的（な女性）であると思いなさるにちがいない。

こうして（男君は女二の宮のもとに通いながら）三日を過ごして、（いよいよ女二の宮が）男君の住む邸宅にお入りになる儀式は、格別（の立派さ）である。寝殿の渡殿（＝渡り廊下）にかけて、ご装飾がある。女房二十人、子供の召使い四人、雑用を務める女性など、（儀式の立派さは）見る価値のあるところが多くすばらしい。（男君が）女二の宮のご様子を、心静かに拝見なさると、（女二の宮は）たいそう充実した年頃で（容姿が美しく）整って、気のせいか気品

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

があり、洗練されているけれども親しく心引かれる感じで、未熟なところがなくかわいらしい方の様子で、御髪は袿（＝女子の衣服）の裾と同じ（くらいまで伸びた長さ）で、物の姿が（映って）見えるほどに光り輝いて（背中に）かかっている様子などは、（美しさが）この上もない。（男君は）ひそかに気になり続けている木幡の里（にいる姫君）にも（女二の宮は）匹敵なさる（美しさ）にちがいないと思われると、お気持ちは静まって、たいそう（結婚した）価値があるとお思いになった。

【学習プリント】（『伊勢物語』）

昔、男が、（自分の）妹でたいそうかわいらしい様子であった妹を見ていて、

若くみずみずしいので（引き結んで枕にすれば）いかにも寝心地がよさそうに思われる若草（のようなあなた）を、

（私以外の）誰かが引き結ぶ（＝契りを交わす）ようなことを（私はつらく）思う。

と（詠んで妹に）差し上げた。（妹からの）返歌は、

なんとめったにない（あなたからの）言葉であることよ。（私は今まで）心隔てなく（あなたを兄とばかり）思っていたなあ。

解説

問1 やや難 23〜25

正解は (ア)＝① (イ)＝③ (ウ)＝①

(ア) 「さら／ぬ／ほど／の／所」。連語「さらぬ」には、(1)〝そうでない。それ以外の〟や(2)〝なんでもない。たいしたことのない〟の意を表す〈然らぬ〉、および(3)〝避けられない。どうしようもない〟の意を表す〈避らぬ〉があり、選択肢の中では(2)の意の①か(3)の意の⑤だと見当がつく。(ア)の直前部によれば、この「所」とは男君が「参り給ふ（＝参上なさる）」場所を示し、さらに(ア)の直後の副助詞「だに（＝さえ）」と副詞「まして（＝いわんや）」との呼

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

応に注目すると、〈たいしたことのない場所に参上するときでさえ、身だしなみには格別に配慮なさる男君であるので、いわんや、（非常に高貴な）三条院に参上する際はなおさら並一通りではない〉という解釈が文脈に当てはまるので、①が適する。

(イ) 副詞「いつしか」（または連語「いつ／し／か」）および「ゆかしう」（形容詞「ゆかし」連用形のウ音便化）から成る。「いつしか」は(1)〝いつ～か〟という疑問の意、(2)〝いつのまにか。知らない間に〟という不定を表す意の他に、(3)願望の表現を伴って〝早く（～したい）〟の意を表す。一方、「ゆかし」には〝心引かれる〟の意と並んで、〝（見る・聞く・知る行為を）したい〟という願望の意もあり、これが「いつしか」の(3)と呼応して、「宮の御さま（＝女二の宮のご様子）」を「早く目にしたい」という男君の心情に合致するので、③が正解。これと比べて①の「見られる」は願望の意が薄い。

(ウ) 「おくれ／たる／ところ／なく」。動詞「おくる」の語意は、(1)〝遅れる〟、(2)〝後に残る〟、(3)〝先立たれる〟、(4)〝劣る〟。この意に沿う選択肢は①「未熟な」と③「流行から外れる」、④「時間にいい加減（＝遅れる）」である。文脈的に考えると、(ウ)は「なつかしげに（＝親しく心引かれる様子で）」や「うつくしき（＝かわいらしい）」などと、美しい盛りにある女二の宮の内面からあふれる魅力を称える一節に位置するから、服装や態度の外面的な形容である③・④は外れ、「おくる」の(4)の意に沿う①が最適である。

問2 標準 26 正解は②

傍線部の語句と表現を問う設問。語句の文法的説明から誤りを見極めたうえで、文脈に即して消去法で考えるとよい。

①不適。接頭語「もの」は主に心情を表す形容詞や形容動詞（「もの悲し」や「ものあはれなり」）などに付くため、格助詞に付くAの「もの」は名詞である。文脈的にも、「ものの嘆かしさ」とは中納言（＝男君）の木幡の姫君に対する恋の苦悩と見るのが自然であり、その思いが「紛るばかりに（＝紛れるくらいに）」女二の宮に接したい（「ば

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

や」は自己の願望の終助詞）と男君は決意したのだから、「女二の宮と結婚しても良いのだろうか」などの後ろ向きな心情とは反対である。

②適当。前半部の「紛る」・「ばかり」の文法的説明も正しく、後半部の心情の解釈も適切。2段落以降で男君が女二の宮のもとを訪れ、結婚の準備が進んでいく展開も、この解釈に沿う。

③不適。「見なし聞こゆ」は複合動詞ではなく、動詞「見なす（＝思って見る）」の連用形、および**謙譲の補助動詞**「聞こゆ（＝～し申し上げる）」の二語から成る。この「聞こゆ」は謙譲語であり、内心の声の発話者である男君の動作の「見なす」に添えられているから、その敬意は「見なす」という動作の受け手である女二の宮に向けられている。

④不適。前半部の「思す」・「けり」の文法的説明は適切。一方で、後半部の説明に関しては、「いつのまにか」や「気づきを表し」などが、木幡の姫君への思いを断ち切るために女二の宮を結婚相手として**意図的**に「見なし」、「ばや」と**明確に願っている**男君の心情と矛盾する。

問3 やや難 27 正解は③

範囲（段落）を指定して内容（**登場人物に関する説明**）を問う設問。傍線が付された設問と違い、まずは選択肢を読んだうえで、それぞれに本文の該当箇所を見つけ、正誤を判断する必要がある。ただし、選択肢はおおよそ本文の展開に沿った順と見なせるだろう。

①不適。春の中納言に関する本文の記述は1段落3～4行目のみ。ここと比較すると、「女二の宮の結婚相手を選ぶ際には一歩及ばず」は適切だが、それが理由で「男君にあらためて**畏敬の念**（＝おそれうやまう気持ち）を抱いた」は誤りで、正しくは「よろづすさまじく」すなわち〝万事が興ざめに（＝おもしろくなく）〟感じたのである。

②不適。参照すべき本文の箇所は①と同様であり、春の中納言が「女二の宮と結婚することを諦めきれなかった」は読み取りうるとしても、全力で「女二の宮を（男君から）**奪い取ろう**」という積極的な気持ちは「すさまじく」にそ

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

ぐわない。

③適当。関白すなわち男君の父（＝「殿」）に関する本文の記述は2段落の最終文のみ。この箇所の「～ましかば…」は〝もし～だったならば…（だったろうに）〟という反実仮想の意を表す。「大宮」すなわち関白の亡き妻が生きていれば「面立たしく（＝名誉に）」感じて喜んだだろうものとは、その直前の「まことに帝の……人の御さまなり」とあるように、選択肢で言う「息子（＝男君）の立派な姿」である。

④不適。院に関する本文の記述は、1段落の「官位の短きを飽かぬことに思しめされて（＝女二の宮の結婚相手としては男君の官位が低いことを不満足だと思いなさって）」、および3段落の「院には、待ち取らせ給ふ御心づかひなのめならず（＝男君を待ち迎えなさるお心配りが並一通りではない）」の二箇所のみ。それを見抜くポイントは、前者では、そのように思った結果として**男君を権大納言に昇進させうる人物とは誰か**を考えること、後者では、貴人の主語に付き、尊敬語の述語を伴って**間接的な敬意**（～におかれては）**を表す格助詞「に」**をおさえることである。よって、院に関して、選択肢にある「娘（＝女二の宮）が幼かったころの日々」の回想や、「あふれる涙」といった心情に該当する記述はない（「涙」の比喩である「露」や「時雨」は、男君と女二の宮との間でのみ登場する）。

⑤不適。④と同じ本文の二箇所と比較しても、院が「男君を叱咤激励（＝大声でしかるようにはげまし元気づけること）し」に当たる記述はなく、「**あえて厳しく接した**」という説明も、本文の「御心づかひなのめならず」という記述のみからは読み取れない。

問4 やや難 28 正解は②

範囲（段落）を指定して内容を問う設問。問3と同様の手順で解くが、和歌の解釈も必要となる。

①不適。一夜を共にした翌朝に、男君が女二の宮に詠み贈った「今朝はなほ…」の歌、および女二の宮からの「今朝のみや…」の返歌の解釈が問われる。その前にまず、貴族の妻問婚（つまどいこん）における慣習として、一夜を共にした翌朝、起き

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

別れて（＝**後朝**（きぬぎぬ）**の別れ**）帰宅した男性は、女性に**名残を惜しむ歌を贈る**ということを確認したい。そのうえで今回、返歌を受け取った男君の反応として、④段落の「御手などさへ、なべてならず……思ふやうなりと思すべし」、すなわち〈男君が、優美な筆跡を含めて、女二の宮を理想的な女性だと思った〉ことをふまえると、結婚相手に対する男君の満足げな気持ちが読み取れる。この点だけでも、選択肢の「（女二の宮は）まだ自分（＝男君）に遠慮しているようだと思った」という打ち解けない表現はそぐわないとわかる。そのうえで和歌の解釈に入るが、和歌の贈答を解釈する際の常として、**(1)比喩や掛詞**などの修辞法を読み解き、**(2)表面的な意味（自然・非人情）と裏側に込められた意味（人為・人情）との対応**に留意しながら、**(3)和歌に託されたメッセージの応答**をおさえることが重要である。まず、和歌では主に女性の比喩である「**女郎花**（をみなへし）」は女二の宮を表すと考えるのが自然であり、これと**縁語**の関係にある他の語も二重の意味を持つ。すなわち、動詞「**しをる**」には〝（草木などが）しおれる〟と〝（人が）気落ちする。悲しみに沈む〟または〝（衣などが）ぐっしょりとなる。濡れそぼつ〟の意、名詞「**露**」には〝（草木の葉などに付く）水滴〟と〝涙〟、名詞「**時雨**（しぐれ）」（または動詞「時雨（しぐ）る」の形でも）には〝（晩秋から初冬にかけて降る）小雨〟と〝涙ぐむ。落涙する〟の意が含まれる。さらに、**掛詞**として、動詞「（露が）置く」は「起（お）く（＝寝所から起き出る）」の意、動詞「霜がる」の「枯る」は「離（か）る（＝男女の仲が疎遠になる。男の訪れが途絶える）」の意も含むだろう。なお、男君の手紙がふまえる「いつも時雨は…」の歌における動詞「袖ひつ」も〝（涙で）袖が濡れる〟の意であり、やはり別れの悲しさを表す。以上の比喩や修辞法もふまえて、歌の表裏の意味を考え合わせると、男君が〈**今朝の女二の宮との別れに際して私は悲しみに沈んでいる**〉と名残惜しさを伝えたのに対して、女二の宮も返歌で〈**今朝の別れだけでなく、男君と会えないときの私はいつも悲しんでいる**〉と自らの愛情の深さを伝え返している、と理解できる。こうした返歌を得たからこそ、男君は女二の宮を理想的な女性と認めたのであろう。よって、選択肢の「男君は逢瀬の後の寂しさを詠んだ歌を贈った」は正しいが、「女二の宮は景色だけを詠んだ歌を返して」や「男君の思いに応えようとしなかった」は誤り。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

②適当。①で説明した通り、男君からの手紙、女二の宮からの返歌、それを読んだ男君の「満足」いずれも本文に合致する。なお、「男君の手紙の言葉（をふまえたもの）」とは「女郎花」や「時雨」を指し、「内容」も「素晴らしく」とは4段落の「御手などさへ」における添加の副助詞「さへ（＝…に加えて～までも）」の含意をふまえた説明と考えてよい。

③不適。「（男君は）密かに木幡の姫君とも関係を持とうと考えた」と読み取れる根拠が本文にはないので誤り。

④不適。「結婚の儀式が盛大に執り行われる」などの説明は5段落の「殿へ入らせ給ふ儀式……見どころ多くいみじ」に合致するが、女二の宮が「男君と木幡の姫君の関係を察していた」や「結婚の先行きに不安を感じた」と言える根拠は本文にない。

問5 やや難 29・30

正解は (i)＝① (ii)＝③

本文と【学習プリント】を関連づけて生徒の話し合いの結果を考えさせる設問。傍線部Bの表現について、まず(i)［ステップ1］ではBがふまえる『伊勢物語』の和歌に関する【ノート】を完成させ、それに基づいて(ii)［ステップ2］ではBに表現された男君の心情を答える。解答上のポイントは、(i)では修辞法と文脈的理解について【ノート】に示された手がかりに十分に留意すること、(ii)では【ノート】の内容と本文の人物関係との一致点をおさえることである。

(i) 【学習プリント】の［ステップ1］では、和歌Ⅰの「うら若みねよげに見ゆる若草」に込められた「別の意味」、すなわち自然（若草）に関する表面上の意味と違う、人為・人情に関する裏側の意味に基づいて兄（「男」）から妹へのメッセージを読み取ることが求められる。【ノート】によれば、〈「若草」とは妹を表す〉比喩であり、〈「人」が「若草」を「結ばむこと」には裏側の意味（＝X）がある〉とわかる。そこで、語句と文法の面から和歌Ⅰを考えると、「うら若み」は形容詞「うら若し（＝若々しい）」の語幹（「うら若」）に接尾語「み」が付いて原因・理由（～ので）を示す用法であり、形容動詞「ねよげなり（＝いかにも寝心地がよさそうだ）」の「ね」は若草の〈根〉や〈旅寝〉の意とと

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

もに〈（男女の）共寝〉の意も持つだろうこと、したがって、「人の結ばむこと」には〈（若々しいので共寝したくなる妹と）**人が縁を結ぶ**（＝結婚する）〉という含意があると理解できる。ここで、和歌Ⅱに関する**【ノート】**の記述にも注目すると、和歌Ⅰに対する妹の反応は「驚き」であり、「自身が兄の気持ちにこれまで気づいていなかった」ことを表す和歌である。よって、妹に対する「兄の気持ち」とは、**〈兄妹という間柄では通常考えにくい感情〉**であり、Yは①「妹への恋心」が最適である。この感情と整合的で、かつ語句・文法面でも合致するXは、①「自分ではなく他人が妹と結婚すること」であり、和歌Ⅰの「思ふ」とは〝つらく（惜しく）感じる〟の意だとわかる。なお、②「親」は話に登場せず、③「束縛して結婚させない」というほど強い兄の決意は読み取れず、④「まだ若いのに」の逆接「のに」は「うら若み」の語法に反する。

(ii) (i)をふまえると、傍線部Bの「人の結ばむこと」とは**〈木幡の姫君が**（自分以外の）**他人と結婚すること〉**（＝男君）を意味し、全体で**〈（異母）妹である木幡の姫君に対する男君の恋心〉**を表すと理解できる。こうした恋心を「思ひつづけらるる（＝ずっと思わずにはいられない）」（「らるる」は自発の助動詞「らる」）自分自身について、男君は「我ながらうたて（＝**自分自身のことではあるが嘆かわしい**）」と感じている。「うたて」は形容詞「うたてし」の語幹のみの用法である。男君のこうした状況および自己嫌悪を示した③が適する。①「妹への思いを諦めようとしている」や②「兄として木幡の姫君の結婚を願う」は〈妹への恋心〉に反し、④「院の複雑な親心」を読み取れる本文箇所もない。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

第4問

標準

出典

Ⅰ 安積艮斎（あさかごんさい）『洋外紀略』〈巻中　話聖東伝〉

Ⅱ 胡広ら『性理大全』〈巻六十五〉

安積艮斎（一七九一～一八六一年）は江戸時代後期の儒学者。陸奥国郡山（こおりやま）の出身で、江戸に出て神田駿河台に私塾を開き、後に二本松藩校・敬学館の教授、さらに昌平黌の教授となった。『洋外紀略』は一八四八年に著された国防論（全三巻）であり、世界の十一の大国の歴史地理や軍事を述べた上巻、人物伝・通商論・宗教論を収めた中巻、海防を論じた下巻から成る。本文は中巻の、アメリカ合衆国初代大統領ワシントンの評伝の一節である。

『性理大全』は明の永楽帝が『五経大全』『四書大全』とともに胡広らに命じて編纂させた、性理学（朱子学）の大全集（全七十巻、一四一五年成立）。宋・元の性理学者百二十余人の説を分類し、精密な注釈を付して採録している。本文は『資治通鑑』の編集も助けた北宋の儒学者・歴史家、范祖禹（はんそう）（一〇四一～一〇九八年）による君主論の一節。

要旨

Ⅰ

ワシントンの政治姿勢は清廉・公正で誠意を重んじ、優れた人物を登用して政治に参加させ、法令・軍備を整えて厳粛に国を治めた。大統領の任期満了後は故郷で隠棲し、功名を求めずに天寿を全うした。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

Ⅱ 一身で広大な天下を治め、膨大な政務に対応する君主は、誠意をもって賢明な臣下と協力し、私情を離れて平静な「明鏡止水」の心構えを保つことで、自らの見聞や思慮を天下に及ぼすことができる。

読み

Ⅰ 話聖東政を為すや廉にして公、誠を推して物に待す。巴爾東なる者有り、明敏にして器識有り、辞令に嫻ひ、大体に通ず。話聖東之を挙げて、政事を参決せしむ。任に在ること八年、法令整粛、武備森厳にして、闔州大いに治まる。然れども人或いは其の為す所を議する者有れば、話聖東感憤す。任満つるに及びて、乃ち旧閭に還り、深く自ら韜晦し、復た功名の意無し。寿を以て家に終はる。

Ⅱ 人君は一人の身を以て、四海の広きを御し、万務の衆きに応ず。苟しくも至誠を以て賢と与にせずして其の独智を役して以て天下に先だてば、則ち耳目心志の及ぶ所の者、其れ能く幾何ぞ。是の故に人君必ず心を清めて以て之に澄み、己を虚しくして以て之に待すること、鑑の明なるがごとく、水の止まるがごとくなれば、則ち物至るも罔ふること能はず。

全訳

Ⅰ ワシントンが政治を行うあり様は清廉かつ公正で、誠意を大切にして人物を待遇した。ハミルトンという者がいて、道理に明るく頭の働きが鋭くて才能と見識があり、文章の執筆に習熟し、政治の要点に精通していた。ワシントンは彼を登用して、政治に参加させ（重要な事案を）決定させた。（ワシントンは）大統領の地位に八年間あり、（その間）法律と命令はおごそかに整い、軍備は重々しいさまで、国中が非常に安定した。そうではあるけれども時にはワシントンの行った政治について非難する人がいたので、ワシントンは怒りを感じた。（大統領の）任期がついに満了

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

すると、（なんとワシントンは政界を引退して）故郷に帰還し、自分から身を隠して世間の目につかないようにし、決して功績を挙げて名誉を得ようとする意志を持たなかった。（そうして）天寿を全うして自宅でこの世を去った。

Ⅱ　君主（というもの）は（たった自分）一人の身体によって、広大な天下を統治し、数多くのあらゆる政務に対応する（必要がある）。仮にこの上ない誠意で賢人と助け合うことなく自分の知恵だけを用いて天下を（先頭に立って）導くならば、君主の見聞や思慮が及ぶ範囲は、決して広くない。こういうわけで君主がもし（きっと）心の汚れ（＝雑念）を取り除いて政務に臨み、私情を捨て去って政務に対処する態度が、（まるで）曇りのない鏡のよう（＝澄みきった状態）で、（波立っていない）静止した水のよう（＝落ち着いた状態）であるならば、外界の事物が影響を及ぼすとしても（君主の）心をまどわすことはできない。

解説

問1　標準　31・32

正解は　X＝①　Y＝⑤

空所補充の設問。Xは【文章Ⅰ】、Yは【文章Ⅱ】の主に直前直後をふまえ、漢字の語義と考え合わせて選ぶ。

X　空欄直前の「話聖東政を為すや」（「や」は主題を提示する助字）に着目すると、Xは〈**ワシントンの政治の行い方**〉を形容する語であり、かつ直後には接続の意を表す「而」があるから、「公」（＝公平・公正）と並列される語である。加えて、続く「**誠**（＝誠意・誠実）を推して」からも、ワシントンの政治姿勢を**肯定的に評価する語**だと見当がつく。よって、①「廉」（＝清廉。心が清く正しい。私利・私欲がない）が適する。②「刻（＝きびしい。むごい）」、③「頑（＝かたくなだ。融通がきかない）」、④「濫（＝道理に背く。度が過ぎる）」、⑤「偏（＝かたよる。公平でない）」はいずれも否定的な意味で不適。

Y　空欄を含む一文に着目すると、「四海の広きを御し」と「万務の[Y]（に）応ず」とが**対句**であるから、Yには「広

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

（＝広大）」の語義に対応し、「人君（＝君主）」の「万務（＝あらゆる政務）」を形容する語が入ると推測できる。①「要（＝要点。大切なところ）」や②「美（＝立派だ。優れている）」は、君主の行う政務の〈広大さ〉の意にそぐわず、③「対（＝つりあう。相手になる）」や④「臣（＝臣下）」では文意が通らない。よって、⑤「衆（＝数が多い）」が最適である。

問2 標準 33・34

正解は (ア)＝② (イ)＝④

波線部の解釈を問う設問。まずは漢字の語義をおさえたうえで、必要に応じて文脈との整合性からも判断したい。

(ア) 「**寿**」には〝寿命。長寿〟および〝ことほぐ。祝い事〟などの意があり、「于」は「家」という〈場所で〉を表す置き字。「**終**（＝おしまいになる。完成する。死ぬ）」という語義から、③「（余生を）過ごした」や⑤「（節義を）貫いた」はそぐわない。また、直前の文からは引退後のワシントンが行うような①「事業」は見当たらず、④「（長寿の）親」も本文に登場しない。残る②が正解で、「寿」＝「天寿」、「終」＝「この世を去った」の訳出も語義に沿う。

(イ) 動詞「**役す**（役して）」は〝使う。使役する〟を表し、その目的語である「独（＝ただ～だけだ）」と「智（＝知恵。賢さ）」の意も見当がつく。「其」が受けるのは第一文から続いて「人君」である。さらに直前の「而」に着目すると、その前の「賢と与にせずして（＝賢人と助け合うことなく）」と並ぶ内容とわかるから、文脈的にも④「自分の知恵だけを用いて」が適する。①「比類のない（＝比べるものがないほど際立っている）」や②「誇示して」、⑤「しりぞけて」は語義から外れ、③「賢人を模倣して」は文意が正反対。

問3 標準 35

正解は⑤

返り点と書き下し文を問う設問。重要な句法・用字に着目して文の構造を見定めたうえで、文脈にも沿うかを確認する。はじめに「有二～者一（あり（スル）もの）（＝～する人がいる）」という句法、および後にくる動詞を名詞化する返読文字「所」（「所二（ところ）

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

〜「(スル)」＝〜するもの・こと）をおさえると、「者」から「有」に返らない②・③・④、動詞「為(ナス)」と読んで「所」に返らない①は、いずれも外れる。なお、②・③のように「…の為(ため)に（〜す）」と読む場合の語順は、「為(ため)ニ…ノ（〜）(ス)」となる。以上より、正解は⑤に絞られ、「其の為す所を議する者有れば」で〝**其の行うことを議論する者がいたので**〟の意となる。次に文脈から考えて、「其」が受ける主語は前から続いて「話聖東」、「其所為」は〈ワシントンが行う政治〉と解釈すると自然である。さらにAに対する「感憤す（＝怒りを感じる）」という反応をふまえると、ここでの「議す」は〝そしる。非難する〟の意が適し、〈心清く誠意をもって〉政治を行ったワシントンの人柄ゆえの反応として全体の趣旨にも沿う。

問4 標準 36 正解は①

傍線部の解釈を問う設問。問3と同様に、句法・用字と文脈の両面を考え合わせる。

まず、「（及ぶ）所」は問3と同じ用法であり、読点（、）の直前にある「者」は**主格・強調**（〜は）を表す。また、下から返らない場合の「能」は「よク〜」と読んで**可能**（〜できる）の意、「〜幾何」は「〜（スルコト）いくばく（ゾ）」と読んで〝どれくらい〜するか（いや、たいして〔少しも〕〜しない）〟という**疑問または反語**の意を表す。そのうえで、「耳目心志（＝見聞・感覚や思慮）」の主体は直前の文から続いて「人君」ととるのが自然だから、主体を「天下の人々」とする②・③・⑤は外れる。さらに、問1のY（政務の多さ）を前提として考えると、問2の(イ)を含む「苟しくも至誠を……天下に先だてば」（＝もし君主が膨大な政務に対処する際に賢人と協力せず自分一人の知恵を使うだけならば）という仮定条件を受けて、その帰結を述べる部分がBである（「則」がそれを示す）から、ここでの「幾何」は〈（見聞・思慮の及ぶ範囲が）**たいしたものではない**〉という反語、つまり「決して広くない」の意で解釈する①が適し、④「とても数え切れない（＝非常に広大だ）」は正反対だとわかる。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

問5 標準 37 正解は③

傍線部の内容を問う設問。比況形「～は…のごとし（＝～はまるで…のようだ）」を用いたCは、「水の止まるがごとく（＝水が静止したようだ）」という比喩。と同時に、その直前の「鑑の明なるがごとく（＝鏡が曇っていないようだ）」と対句を成し、〈澄みきった静かな心境〉を表す慣用表現「明鏡止水」（『荘子』徳充符による）でもある。加えて文脈的に、Cの主語にあたる「人君必ず心を清めて……以て之に待すること」は、問4までで見たように、第一文から引き続いて〈君主が政務を行う際の姿勢や心構え〉について論じている。これらを考え合わせると、選択肢のうち、「波立っていない静かな水」という比喩それ自体と、政務において「君主が雑念をしりぞけて落ち着いている」という比喩の表す内容とを両方示す③が適当である。

① 「水が……たまっていく」という移動や集積を表す比喩も、「人々の意見」を主語とする内容も、ともに外れる。

② Cが述べるのは、「公平な裁判」などの実際的な行為の現れではなく、君主の内面的なあり方である。

④ 「水」の「豊富」さを示す比喩は、本文には見当たらない。「善行（の積み重ね）」という内容も本文から外れる。

⑤ 「水をせき止める」は〈静まった状態〉ではなく意図的な動作。君主自身でなく「人々のおごり」とする点も誤り。

問6 標準 38・39 正解は (i)＝① (ii)＝⑤

本文と【資料】に基づく会話を完成させる設問。会話において「教師」は、「もとは西洋に批判的だった」渋江抽斎（森鷗外の作品の登場人物）が西洋に肯定的な考え方に転じた理由について、【文章Ⅰ】および【資料】の「話聖東伝」の描くワシントン（＝西洋の理想的な為政者像）と、【文章Ⅱ】の示す「儒学の伝統的な君主像」とが一致したからだと示唆している。この読みの誘導に従って、設問の(i)では【資料】の内容を、(ii)では【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の共通点を答える。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。

(i) 【資料】で留意すべき語や句法は、詠嘆形の「嗚呼」、逆接（ここでは確定条件）を表す「雖二～一」、場所や対象を表す置き字「於」、〝人柄・性格〟の意の名詞「為人」、〝高く評価する〟の意の動詞「多」、そして〝～するに値する。～に十分である〟の意の動詞「足二～一」。よって全体は、「嗚呼、話聖東、戎羯に生まると雖も、其の人と為り多とするに足る者有り」と読んで、〝ああ、ワシントンは、異民族の出身ではあるけれども、その人柄は称賛に値する点がある〟と訳す。空欄aの直前にある「教師」の発言を見ると、問われているのは【資料】の内容であるから、①が適当である。なお、【資料】の「戎羯に生まると雖も」の部分が「西洋の人々に対する偏見」に該当する。

② 西洋人であるワシントンの出自に否定的なのは、他の「あげつらう人々」ではなく筆者の艮斎自身である。

③ 「肯定的に評価すべき面がある」のはワシントンの「政策」ではなく「人と為り（＝人柄）」である。

④ 「（異民族の出自を）問わずに」が「雖」の意に反し、「欧米と東アジアの人々を対等であると認識し」も誤り。

⑤ 「（異民族の出身で）なかったとしても」が「雖」の意に反し、「欧米と東アジアを区別しない観点に立ち」も誤り。

(ii) bの選択肢と【文章Ⅰ】、cの選択肢と【文章Ⅱ】の内容の一致、および両者に共通する君主像を確認する。

①不適。bの、人々からの反発にワシントンが「動じなかった」は、傍線部A（問3）に続く「感憤す」に反する。またcの「信念を曲げない」も、君主に謙虚な姿勢を求める【文章Ⅱ】から外れる。

②不適。cの「個人の力より制度を重視する」は、君主の謙虚な姿勢を説いた【文章Ⅱ】にそぐわない。

③不適。bの「部下に自分の地位を譲った」が誤り。ワシントンはハミルトンを登用しつつ、「任満つる」まで務めた。

④不適。政策の意図を「文章で示した」とするbは誤り。またcも「人々」とは「賢人」を指すのかが不明確。

⑤適当。bの「優れた人材」はハミルトンに該当し、cの「公正な心」は本文の「至誠（＝この上ない誠意）」や「明鏡止水」の心境と合致する。このように「賢人と協力する」ワシントンの政治は、（問2の(イ)と問4で見た）「賢と与に」膨大な政務に対処すべき君主のあり方と共通する。

© Sekaishisosha-Kyogakusha Co., Ltd.
無断複製・転載を禁じます。